

京都の町を流れる鴨川。三条大橋付近が、大藪家の信仰の糸口になった場所である。明治17(1884)年、身上で苦しむ父常次郎のために母つねが医者呼びに行ったところ、期せずして斯道会(河原町大教会の前身)の役員から話を聞くことになった。この三条河原町は、斯道会の揺籃の地である。



## 海越え山越え

—草分けの道を訪ねて—

大藪 安太郎 著 福音堂教会

12

# みちりねとこ

立教163年  
5月号

春の学生おぢばがえり

**真柱様お言葉** (要旨)

ひのきしんデー直前特集

海越え山越え — 大藪安太郎

教会ルポ「われら信仰家族」 田主丸分教会

八百屋を営む大蔵家の家長である常次郎の身上から、信仰に目覚めた家族。九死に一生を得るご守護を目の当たりにした息子の安太郎は、道の上にその身をささげた。まず常次郎を講元として講社を結成。安太郎を中心に、にをいがけ、おたすけに邁進する中に、稼業もきつぱりとやめた。温厚でおとなしい父と男勝りの母の後ろ盾のもと、地元住民からの村八分、僧侶らの妨害にも屈することなく通り抜いた。



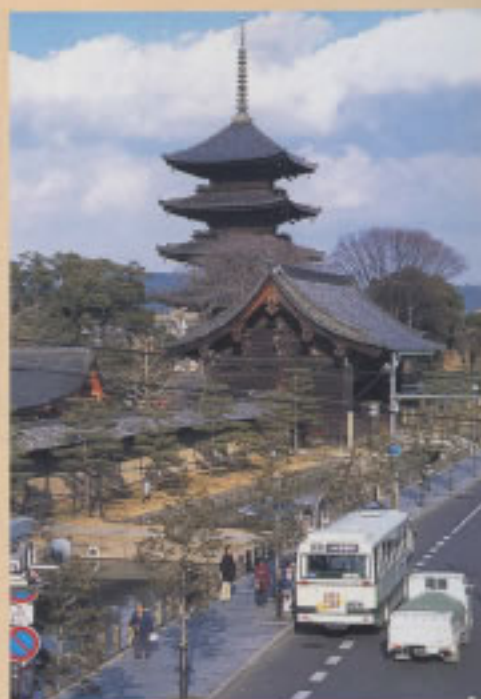
京都市の西方が布教地であった。乙訓方面をはじめ、山を越えて能勢(大阪府)、丹波(京都府下)方面へと道はつながった。幾多の迫害・干渉にもひるむことなく、地道な歩みを続けた。(京都タワーから撮影、中央左に唐橋分教会の屋根が見える)



吉川(京都府亀岡市)の信者宅を訪問する際、反対者に待ち伏せされたこともある。



大蔵家は、錦小路(京都市中京区)で「唐常」の名前で青物商をしていた。



母つねは、市内の繁華な場所を選んで路傍講演した。教会に近い東寺の前でも、熱弁を振るった。



桂大橋の近くの店先で。



平安京の正門、羅城門の跡。唐橋分教会と約1キロ離れた東寺との中間点に位置する。(京都市南区)



桂川の左側が桂方面で、この地にある講社づとめに行くのは、「命懸け。だと言われたほど反対攻撃が激しかった。明治23年11月、部内講社での問答がきっかけとなって、大討論会が開催された。本部に応援を要請し、多数の僧侶や青年らと対峙した。

# 父親の身上を通し 家族が一丸となって

## 第12回

### 唐橋分教会初代会長 大藪安太郎



(おおやぶ・やすたろう)  
慶応3(1867)年11月28日生まれ  
昭和4(1929)年11月1日出直し

大藪安太郎の信仰を語るには、その父常次郎と母つねの歩みにふれずに済まされない。

大藪家が居を構える京都府葛野郡唐橋村(現京都市南区唐橋)は、京都市街の外れに位置している。この一帯は、大部分を水田や野菜栽培地域が占めていた。京都市内へ大量の農作物を移出する近郊農業の土地として、野菜作りが大変盛んであった。また東京への遷都による京都の衰退を回復するために、京都府が勧業政策の一環として農業を積極的に推奨した

つねをはじめ家族は、日夜看護に全力を尽くした。疝気の名医を迎えたり、神仏にも祈念を込めた。しかし、いずれもその効果を見ることができなかった。

発病以来六十日余りたったころには、家族の懸命な看病にもかかわらず、常次郎はこん睡状態に陥ってしまった。家族は、なすすべの無いままに、医者に診てもらおうと、回復の見込みは無く、明日までもたないと、死の宣告をされてしまう。落胆している家族の元に、ある知人が

こともあって、生産はさらに高まり、野菜の宝庫と呼ばれるほどであった。

大藪常次郎は、京都の台所と言われる錦小路の市場で青物を商っていた。唐橋の「唐」と常次郎の常から、屋号を「唐常」といった。

明治十七(一八八四)年になって、一家の大黒柱、常次郎が疝気(漢方では右下腹部を中心として内臓を病む病氣)を患って寝込むようになった。息子で数え十八歳の安太郎が、父に代わって家業を担うことになった。



明治18年、御前通沿いの唐橋の自宅に新道会第十二号講社を設置した。地域住民からの迫害にも屈することなく、同じ場所で歴史を重ねてきた。(京都市南区)



「唐橋支会」の扁額は、初代真柱の筆によるもの。明治26年9月12日、安太郎を会長にお許しを頂いた。



「聯合平講社名簿」(縦約23cm)。明治25年のもので、講元は父の常次郎が務めている。

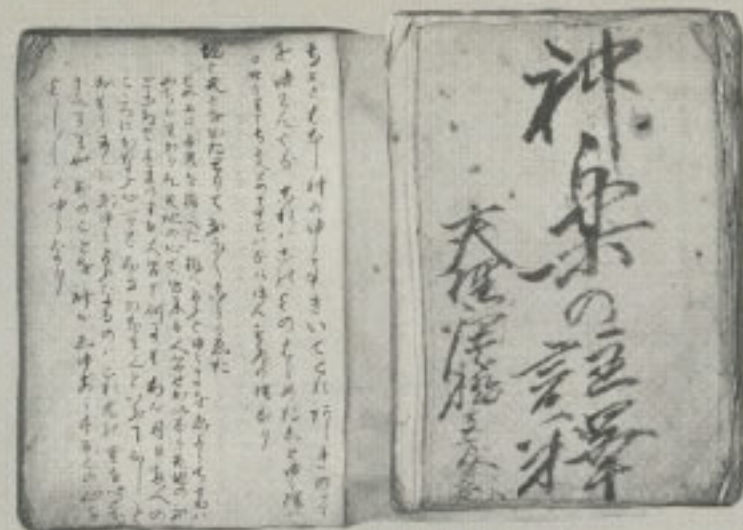


大正3年3月1日、本部神殿(現北礼拝場)などの豊を唐橋から献納した。その際、初代真柱から下げられたという3升(5.4ℓ)入りの徳利(高さ約31cm)。【本文中コラム参照】

写真/的場 啓

海越え山越え

— 草分けの道を拓いて —



「神楽の注釈」(縦約25cm)は、第2節「ちよとはなし」から始まり、細かい解説が記されている。

見舞いに訪れた。その人の言うには、「京都の三条大橋南入る車道の角にある寺の住職が鍼灸の名人で、いかなる重病も必ず完治する」とのことである。

いちろの望みをかけたつねは、直ちに人力車を準備すると、寺に駆けつけた。

### 見えない糸に手繰られて

門前に下車したつねは、そこに居合わせた人に、鍼灸の名医の有無を尋ねた。ある人が言うには、住職は前年に死去して、その後を継ぐ人もいないとのことである。

つねは、顔色を失った。心配したその人が、ぼうぜんと立ち尽くしたつねに助け舟を出した。

「誠に結構なる神様があります……」と、その人の勤め先の主人、堀尾三四郎を紹介したのである。さらに堀尾の紹介で、つねは、斯道会(河原町大教会の前身)の中西寅次郎の元へ案内された。こ

念した。そして頂戴していた御供を常次郎の口に含ませた。

### 父の身上回復とともに

それまで長い間こん睡状態だった常次郎の症状が、御供を頂いてから落ち着きを見せはじめた。その夜、常次郎はぐっすりと眠った。安太郎らは、死の宣告を

大藪安太郎 略年譜	誕生
慶応3(1867)年11月28日	誕生
明治17(1884)年	父の身上をご守護頂き入信
18(1885)年	斯道会十二号講社を結成(講元は常次郎)
21(1888)年12月9日	おさづけの理を拜戴
23(1890)年10月18日	河原町分教会唐橋教所を設置
26(1893)年9月12日	安太郎を会長に唐橋支教会を設置
28(1895)年	安太郎、はつと結婚
大正3(1914)年3月1日	本部へ書を献納
昭和4(1929)年11月1日	出直し。62歳

### 大藪安太郎 略年譜

ラム参照

いきさつを聞いた中西は、こんこんと神様の話を説いた。そして最後に、「病人はたすかる。大丈夫や。帰ったらすぐにこれを頂かせなさい」と金米糖の御供を渡した。「大丈夫」との力強い言葉に、つねの心に何か確信に

似たものが芽生えていた。

つねは、来た道をとって返した。

その帰りを今か今かと待っていた家族は、鍼灸名人の和尚の姿がないことに戸惑った。つねは、ことの成り行きを順を追って説明した。家族は、つねの言葉に従って、共に沐浴し、懺悔して神様に祈

受けていた父の変化に驚くとともに、神様の恐れ多さに打ち震えてむせび泣いた。常次郎は、次第に食欲が進んで、一週間もすると、もとの状態の八割ぐらいいまで回復した。診察に訪れた医者も、あの病人が、と驚きを隠せなかった。二週間がたつたころには、すっかり病が癒えて、外に出歩けるまでになり、不思議なたすかりがあったと、近所でも大層評判になった。

家族の喜びのほどは、言うまでもなく、斯道会のおつとめにたびたび参加した。ところが、六カ月が過ぎたころになつて、病が再発してしまふ。驚いた家族が、中西のもとを訪ねたところ、

「疑い深く、真実の心が定まっていな」と諭された。

あらためて、深く懺悔するとともに、家族の中の一人が道の上に尽くすことを心定めてお願いした。

これまた鮮やかなご守護を頂いて、このときは三日のうちに全快した。それから、安太郎は道一条に、家族

### 斯道会の中心人物

明治17年3月上旬、教祖から斯道会(河原町大教会の前身)の結成が許された。講元を勤めた深谷源次郎(河原町大教会初代会長)は、下京区第六組大黒町(中京区大黒町)で鍼治屋を営んでいた。

同年、大藪つねに教えを説いた中西寅次郎は、三条大橋近くの京区第六組石屋町(中京区石屋町)に住んでいた。「明治18年1月からは、源次郎の家に近い車道で、車商を営む本会周旋方中西寅次郎宅の二階を斯道会のおつとめ場とした」(「河原町大教会史」)とあるように、斯道会の中心人物であった。

また、同じ町に住んでいた堀尾三四郎についても、「本会周旋方で先斗町の料亭『鳥三』こと堀尾三四郎の家に、本会の周旋方と大多数の部内講元を招集された」(「河原町大教会史」)と記されている。

は安太郎の布教活動を支えるべく、家業に精いっぱい力を尽くした。

この十八年には、常次郎を講元に斯道会十二号講社を結成。月に三度、七、十七、二十七日をおつとめ日と定めて、おつとめを勤めるようになった。

海越え山越え

—草分けの道を拓いて—

## 大藪常次郎・つね夫妻



大藪家の信仰の端緒となった常次郎は、穏やかで気の優しい人であった。村の人々の信望も篤く、村だけでなく遠方からも、もめごとの仲裁を頼まれるような人柄であった。

妻つねの実家は、薙刀や剣道の道場を開いていた。つねは、幼少のころから、剣道、薙刀、弓道の術を身につけて、背は高く男勝りの性格であった。その反面「温かい、情のある人」と慕われた。

常次郎は講元として唐橋の基礎を築き、83歳まで長生きした。また、つねは85歳の長寿を全う、直前までおたすけに歩き、繁華な町の辻々で路傍講演を行ったり、近所の子どもに菓子を与えることを楽しみにした。

こともできないので、三疊敷きの借家に移り住み、できる限り道の上に尽くすことを、家族中で心に誓った。

そんな中、債権者から使いが来て、「他の家とは違って、人をたすける信仰のための借金だから、力になる」と、協力を申し出たのであった。

しかし、安太郎は情の上から、できぬことと辞退した。それでも再三の申し出

## 債権者から協力の申し出

唐橋の道は、大阪の能勢方面や府下の丹波、丹後方面などにも伸びて、遠方からも参拝者が訪れるようになった。

しかし、教勢が伸びるに従って、安太

郎以外の家族も家業をやめて布教に出たために、その費用がかさむようになっていった。安太郎の家族は、食うや食わずでも、人々には、不足をさせないように心を使っていたこともあって、ついには家財道具から家屋敷までもが抵当になってしまった。かといって債権者を煩わす



桂川の桂大橋は、弘化3(1846)年に架橋された。川沿いの道では、暴漢に襲われたり、竹槍での反対攻撃にも遭った。

## 村八分にも属することなく

やがて近郷近在に、にをいがかかり不思議なおたすけが相次いだ。

「信心するのは結構なれども、家事を打ち捨てて信仰に従事するのは、絶対にならん」

唐橋村の村長、大藪重次郎から忠告を受けた。しかし、そんなことでやめてしまふような信念ではない。親の命をもつ

て固めた信仰信念で、ますます前進した。村長は、村内で講社に加入する人々を呼び集めて、信仰をやめるよう訴えた。もしもやめない時には、小作人は田地を返せなどと脅迫した。人々は、その言葉におびえ恐れて、安太郎一家を除いてすべてが、講社をやめてしまった。

さらに、寺院の僧侶と反対村民が、迫害を続けた。寺院では、天理教退治の演説会がたびたび開催された。また、村の会議所に僧侶や村民が集合して、安太郎を呼び付けて詰問することもあった。寒い時期でも、玉の汗を流しながら大議論が繰り返されたという。また夜半になっても決着が付かず、夜を徹するようになった。激しいやり取りの後は、さすがの安太郎も疲労困憊だった。

村方とは絶交同様で、その上、警察の干渉もあって召喚されることもあった。こうした状況は三年にも及んだ。

出張先でも、反対妨害や干渉などの困難はあった。しかしそれでも、教勢は伸展した。

## 上桂事件

明治23年11月21日に、おさしづを仰いでいる。割り書きには、

「京都にて僧侶等集まり、天理教攻撃するとかにて、対抗上河原町分教会も説教するに付、本部より一二人出張あり度儀申出により伺」とあり、それに対して、

「何も恐れる事は一寸も要らんで「天の理は濁そうと思つても濁れる事はない」とのお言葉であった。

こうした中、明治二十三年十月十八日には、河原町分教会唐橋説教所を設置した。このとき、地方庁の認可も得て、公然とおつとめができるようになった。

その直後の十一月には、唐橋の部内講社で僧侶とのいざこざから、いわゆる「上桂事件」が起こった。これは、僧侶などの反対行動の多い京都市の西部で起きたもので、河原町としておさしづを仰いでその対応を図った。(右コラム参照)



「豊運兼用具及報知先覚」(縦約13cm)。本部への豊献納の際にかかる、運搬費用の予算が、人夫を300人の見込みで記されている。

## 雷に打たれて

唐橋の豊献納のエピソードが、「雷に打たれて神恩を頂く」とのタイトルで本誌大正3年4月号に掲載されている。

献納を終えた一行は、意気揚々と唐橋に引き上げた。唐橋から自宅に戻る何人かが、雨の中をみかぐらうたを歌いながら大八車を挽いていたときのこと。

「俄然轟然たる雷鳴の一刹那、電閃頭上より火柱を立て、氏の前に落つ。一同の驚き一方ならず、氏は何物か重き物に突き当たりたる如くに感じたり。然るに同氏の前の帯際に青き火の燃えつつあるより、氏は大いに恐れ、戦慄成す所を知らず、無意識に之を払い落とし、一目散に車を挽き逃ぐるが如く馳せ帰りた」

翌朝になって、信者の一人が落雷を直接身に受けたことが判明したものの、かすり傷程度ですんでいたものである。大難となるどころ小難でお連れ通りいただいたことを喜んだのは言うまでもない。



豊献納の際の写真。現北礼拝場の西側から撮影したもので、基壇部分で初代真柱の出迎えを受けた。

目録	
一 御本殿用豊宜	上段四拾四帖 下段一拾二帖
一 御祖殿用豊宜	六拾二帖 中段二帖
一 祖堂殿用豊宜	拾八帖
以上	
右 御献納中上度奉着仕候御受納 被成降度候也	
大正三年三月一日	
天理教本部御中	唐橋分教会

豊献納の目録。神殿(現北礼拝場)、教相殿(現祖堂殿)、祖堂殿(豊田山舎)の豊、総数482枚を納めた。

によって、債務を半額にすることで話がまとまった。

こうした状況を知らない熱心な信者が、たびたび支教会を設置し、新築するよう勧めてくる。安太郎は、勢力が不足で、時期尚早だと断っていたが、信者五人が「われわれが成功させる」と申し出たので、すべてを委託することにした。

ちょうど昼時になったので、食事を求

からは、豊を献納している。

真新しい神殿に豊の入っていない様子を見た安太郎が、「神様の場所に豊がないようでは、申し訳ない」と献納を思い立った。関係者に、豊職人がいたこともその遠因であったろう。

その話を聞いた人々は反対した。それまでも、神殿普請に当たって力を尽くしてきたこともあって、難色を示したの

められた。しかし、米もなく、麦ばかりのおひつを見せると、みなは驚き、現実を知ることになったのである。

明治二十六年九月十二日には、安太郎を会長に唐橋支教会の設置をお許しいただいた。引き続き、普請にとりかかり二十七年六月に竣工した。

長年にわたってわだかまりのあった地域の人々とも徐々に融和していった。そ

だ。しかし、一度決めたことを曲げることのない安太郎。「完納できなければ、腹を一文字に切っておわびします」と熱い思いを受けて、安太郎のまっすぐな性格を知る人々は、付き従っていく。

神殿の横に作業小屋を作り、京都市内はじめ、あちこちから腕の立つ職人を集め、よふはく・信者のひのきしんで豊を作り上げていった。それも重さが、普通の三倍の作りであったという。

八割が出来上がったころ、本部から視察があった。運搬の際の雨具の心配をする視察員に対して、安太郎は、「お言葉を返すようですが、この豊は信者全部がならん中を何でもと思い、心血を注いで作りました。天の親神様に座っていたただく豊に、雨が降るはずがありません」

と答えた。その言葉に、視察員はひざを打って納得した。

そしてついに、総数四百八十二枚にのぼる豊を献納する日を迎えた。大正三年三月一日のことである。

して、三十六年の大凶作のふしを通して、その障壁が消えることになった。これは、地主と小作人の間に立って、条件を取り持つなどしたことがきっかけだった。

### 本部神殿に豊を献納

大正二(一九一三)年末に、本部の神殿(現在の北礼拝場)などが完成した。唐橋

豊用の大八車が百二十一台、荷物用の大八車が四台の計、百二十五台が、教会前の御前通に、二十町余り(一町は約一〇九メートル)にも及んだ。篝火を焚いて、警備にあたり、前日には準備万端整って、その日を持った。運搬には、四百人余りが参加したが、その中には、村の青年団の五十人の姿もあった。

未明から、無事に運搬ができるようにお願いづとめを勤めると、威勢よい掛け声とともに午前三時に出発した。その一団を目にした人々は、何事かと目をみはったという。途中休憩しながら、その日の夕方五時ごろに無事本部に到着した。初代真柱の出迎えを受けて、ねぎらいの言葉を得た。感激もひとしおに帰路についたところ、雨が降り出した。安太郎の面目躍如たるものがある。

安太郎は、五十歳を過ぎたころから、病弱になり第一線を退いた。すべてを嗣子に任せて、教会の守り役に徹した。六十二歳の出直しであった。(文中敬称略)



京都府亀岡市は、京都市内と老坂峠ではばまれた土地。丹波路への入り口で、能勢や丹後方面へと続く道である。